

数寄屋

造りの凝つたその茶室は、四畳半に満たない狭さではあるが、風情がある。裏表千家の家元千野マツ女は、優雅な手つきで煮えたぎるあられ釜の湯を柄杓で、名器であろう茶碗に注いだ（因みに裏表千家は裏千家と表千家の中間の一派であるらしい）。

「イチゴが一円つて、ずいぶん安いですねえー」と、わたし。

「イチゴではありません。一期です」と師匠。

「と申しますと？」

「一期は一生のことです」

「すると一生が一円？」

「一円ではありません。一會です。一生に一度しか会わぬことを一期一會と

いいます。茶の道のココロです」

「と、申しますと」

「どんな人とも一生に一度しか会えないつもりで、出会いを大切に失礼のないように心がけましょうということです」

「それが？」

「茶のココロ。この広い世の中で偶然、狭い茶室で出会うのも何かの縁と心得て、生涯一度の出会いのつもりでおもてなしするのが茶道の大切な心得ということです」

「すると、わたしと師匠がこの茶室で主客となることは再びないと」

「なくはなくとも、ないつもりで心を込めてお茶をたてなくてはいけないといふことです」

と、その時、師匠が御居処（おいど..



お尻)に手をやつて小さく「失礼」と呟いた。
狭い茶室に匂いが充満した。
「うっ」鼻を押さえてわたしは畳に突つ伏した。あまりの臭さに。
「一期一屁の場合も、相手の身になつて急いで空気の入れかえをするのが茶のココロです」
と師匠は、にじり口を開けて、手に袱紗を扇いでオナラを追い出した。

わたしは二度とこのお茶の師匠と出会うことはなかつた。



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。